

## 父と走る

代田中・2 中村 柚亜

「走りにいくぞう。」

という父の言葉で、この時期が近づいてきたのがわかる。それは毎年十二月頃にやってくる小学校のマラソン大会だ。この一言は、父が私を連れ去っていくような感じがする。なぜなら、私は走ることに苦手で、さらに冬の寒い時期に走るなんていじめられているみたいと感じているからだ。

「寒いじゃん。やっぱ走るのやめようよ。」

と言っても父は、

「走れば大丈夫。大丈夫。」

と言い、走り始めるのだ。私は嫌でしかたがなくなると、走っている途中でも、

「もう……やめようよ……。」

と言ってしまう。すると、当たり前のように父は不機嫌になる。こうして父との地獄のような毎日が約二カ月間、続くのであった。

このように私は、小学生の頃から走ることが大嫌いだ。私が低学年の頃のマラソン大会なんて、後ろから数えたほうがいくらいだから、嫌いになるのは当たり前だ。父が走ることに誘ってくれても私は、

「走りたくない。」

とごねてしまつて、走っていない年だつてあつた。

私は中学生になつた。中学校でもマラソン大会はあつた。今年もその時期が来ると、

「走りにいくぞう。」

という父の呼ぶ声があつた。しかたがないので、大会の前までは走

ることに付き合つてあげようと思つた。小学生と違うのは、中学生になると部活動で夕方の時間が短く、また、夕方は課題をやらなければいけないので、朝早起きして父と走りに行つてた。一カ月くらい走つたある朝、私から父に言つた。

「今日、走りに行こう。」

父はうれしそうに、

「おう、行こうか。」

と言ひ、服を着替へた。私は毎日走つていて、マラソン大会を頑張ろうという気持ちになれたのだ。

走るときはだいたい、平日は一キロほど、休日は二キロほど走っている。休日は本気で走る日もあるが、ゆっくり走ることが多いため、私は父に、

「今日どこへ働きに行くの？」

など、日常会話を息切れしながらしている。そんなことをしていると、父から、

「しゃべっていると疲れるぞう。」

と言われることもある。私は走ることが嫌だつたのに、結局毎日走り続けた。

ついにマラソン大会本番になつた。私は駅伝の部に出場し、第一走者だつた。その日は天気が悪く、速く走れるか心配だつたけれど、走っているときにクラスの子が、

「柚亜ちゃん、頑張れえ。」

と言つてくれた。そのような言葉に励まされながら走りきることができた。

家に帰ると、父にタイムと順位を伝へた。順位は十二位で、十位まであと少しだつた。

「惜しかったね。来年また頑張れば大丈夫。」

と父に言われて私は続けて走る気になつた。二月頃にはマラソン大会のときよりも二十秒くらい速くなつてた。

「すごいじゃん。」

と父にほめられると、とてもうれしかった。でも、こんなに速くなつたのは秘密があつた。それは、筋トレもたくさんやっていたのだ。腹筋三十回、腕立て伏せ十回を三セットとスクワット百回をほぼ毎日やり続けた。それは父に言われて始めたことではない。それを父に言うとは、

「すげえ。ようし、ゆずに負けないようにがんばるぞう。」

とうれしそうに言う父を見て、私はなぜか勝つたという感じがした。

中学一年生が終わり、春休みに入っても父と走っていた。タイムがだんだんと上がっていくのを見て、めちゃくちゃうれしかった。

父は私に、タイムが上がるのがうれしい。これからも頑張ろう。と思つてもらえるようにやっていたことに気づいた。父と走っているときに、

「今年も頑張ろうな。」

と毎回言っていたことを思い出した。

私は後悔した。今までなぜ走らされていることに気づかなかつたのだらう。これまで気づかなくて、走ることが嫌だったけれど、今では走り続けることで必ず結果はついてくるということを知り、走ることが少しでも楽しいと思えるようになった。このように走ることに対する気持ちが変わつたのは、父が走らせてくれたからだと思ふ。だから今度走るときは、「ありがとう」という感謝の気持ちを伝えたい。これからは私が言う。

「お父さん、走りに行こう。」